０９／０７／１９　　礼拝メッセージ　　近藤修司　牧師

主　　題：自由と向き合う２
聖書箇所：ローマ人への手紙　６章１９－２３節

「新しくされた者としてそれに相応しく生きなさい」と、パウロは新しい歩みへの奨励をこの１９節で語るのです。新しい歩みを為して行きなさいと。でも、その歩みを始めて行くためには「救い」を正しく正確に理解していることが必要です。ですから、パウロはこれまでに何度も繰り返して、この「罪」と「救い」について教えて来ました。皆さんもこの１章から学んで来て気づかれたことと思いますが、パウロは繰り返し罪」について「救い」について語り続けています。１－２章では福音のすばらしさを語ったパウロが、同時に、人間の罪に迫り来るさばきを警告しました。３章の２１節からは、このすばらしい救いは信仰によってのみ与えられると言っています。しかも、あの信仰の父であるアブラハムの例を用いて説明しました。５章では、救われた者への神の祝福を教えました。そして、こんなにすばらしい祝福をいただいていながらどうして罪を犯すのかと、そのことを教えた後、６章に入って救われた者は生まれ変わったゆえにこれまでと同じ生き方をすることができないと、そのことを教えて来ているのです。　この１９節を見ると、最初に**「あなたがたにある肉の弱さのために、私は人間的な言い方をしています。」**
とありますが、パウロはここでももう一度ローマにいる読者たち、そして、今の私たちひとり一人が、このすばらしい救いを正しく理解するように、キリストにある自由、キリストの恵みによって救われたというこのすばらしい神からの贈り物が、どんなにすばらしいのかをしっかり理解するようにと、そのことをこの１９節に記しているのです。**「人間的な言い方」**とは一般的に人々が比喩や例えを用いて話すことを言っているのです。なぜ、パウロは比喩や例えを用いたのでしょう？私たちと同じです。私たちも人に自分の話していることを正確に伝えようとする時に、よく使うのが例えです。自分の言いたいことを何とかその人に分かってもらいたいとする時に、私たちはそのように例えを用いて話すことを試みます。パウロは実はそのことをしているのです。なぜなら、パウロはこの大切な教えを読者たちが誤解することがないようにとそのことを望んだのです。ですから、彼は**「肉の弱さのために、」**と言います。これがこのように例えや比喩を用いて語る理由だとパウロは言うのです。**「肉の弱さのために、」**ということばを聞くと、私たちはすぐに罪深さのことだと思います。パウロ自身もそのように話して来ました。
　でも、ここでパウロが言っている**「肉の弱さ」**とは、「罪深さ」よりも私たちの理解における弱さです。私たちは残念ながら、生まれながらに神の真理を完全に正しく理解することができない存在です。救われた後も、私たちは神の教えてくださる真理をどれ程分かっているでしょう？残念ながら、繰り返し聞いても学んでも分からないところがたくさんあるのです。ジョン･マレーという神学者は、このことに関して「霊的認識力の弱さ」と言っています。神について、神の偉大さについて、神のなさったみわざについて、また、これから為さろうとされていることに関して、また、神のご計画に関して、私たちにとって理解しがたいことはたくさんあるのです。パウロがローマ人への手紙１１：３３で**「ああ、神の知恵と知識との富は、何と底知れず深いことでしょう。そのさばきは、何と知り尽くしがたく、その道は、何と測り知りがたいことでしょう。」**と言うように、分からないことがたくさんあるのです。みことばを５年学べば、１０年学べば、２０年学べば、５０年学べばすべて分かるのでしょうか？残念ながら、学べば学ぶほど私たちはまだほんの入り口に立ったとしか言えません。残念ながら、不完全な私たちが完全な神のすべてを理解することはできません。パウロが言うとおり、私たちは弱い者です。**「肉の弱さのために」、**理解力において私たちは不完全であるゆえに、正しい理解を得るために、様々な方法をもって私たちはその理解力を助けて行かなければいけないのです。
　そこでパウロは「奴隷」という例えを用いました。もうすでに私たちが見て来たように、この例えは読者たちにとって非常に分かり易い例えだったのです。でも、パウロが言うことは、この奴隷という例えはある程度の意味を伝えることはできても、残念ながら完全ではないということです。なぜなら、神との新しい関係と、その当時存在した奴隷制度とは明らかに異なるからです。人間の主人は不完全ですが、新しい主人である神は完全です。その関係においても、不完全な関係が人間の主人と奴隷の関係です。しかし、完全な神と救われた私たちの関係は、そこに「神の働き」があります。ですから、完全に同じではないとしても、少なくとも、私たちはこれまで見て来たように、また、今日学んで行くように、共通しているところがあるのです。この奴隷という比喩によって私たちが知らなければならない大切なことを私たちは知ることができます。ですから、パウロは間違いなく読者たちがしっかりと真理を理解するようにと言います。

なぜ、パウロはこれ程時間をかけて、私たち人間の罪深さ、そして、神の救いのすばらしさを教え続けるのでしょう？それは、正しい理解はその人の生き方に変化をもたらすからです。真理を正しく理解することによって、私たちの生き方に変化が生じるのです。多くの人々は知識だけをもっています。ですから、いつまで経っても変化が生じません。イエスを信じていない人でも知識はたくさん持っています。しかし、真理を知り、真理を心から受け入れ、その真理に従って行く時に、その人の内には変化が生じて来ます。神があなたに何を望んでいるか？それはあなたの生活が変わって行くことです。そのことは今日見て行きます。あなたの生活が変わって行くことは、キリストにあって可能なのです。なぜなら、あなたは生まれ変わったからです。ですから、私たちは真理をしっかり知ることが必要であるし、その真理を自分のその生活に生かして実践して行くことが必要なのです。

さて、「正しく理解しなさい」とこの１９節でもう一度私たちにチャレンジしたパウロは、その後にこのような勧めを与えています。

☆新しい生き方の実践への勧め

新しい生き方がどのような生き方かを知るだけでなく、それを実践するようにとパウロは勧めているのです。１９節。**「…あなたがたは、以前は自分の手足を汚れと不法の奴隷としてささげて、不法に進みましたが、今は、その手足を義の奴隷としてささげて、聖潔に進みなさい。」**。パウロはこの１９節で「新しい生き方の実践への勧め」を与えています。そして、２０－２３節まではその「実践をする理由」を述べています。勧めるだけではないのです。私たちはなぜそのように生きて行くのか、その理由も述べています。まず、この１９節は「新しい生き方の実践への勧め」ですが、パウロは二つの理由を挙げています。

１．救われたのだから、　　１９ｂ節

救われたからそのような歩みが可能だと言います。あなたが新しい歩みを実践出来るのは、あなたが救われたからだと、そのことをパウロはこの１９節で教えるのです。「**あなたがたは、以前は自分の手足を**」と記されてあるこの第２文節の初めに、実はある接続詞がついています。非常に意味深い大切な接続詞で、それは理由を表わす接続詞です。なぜ、パウロはそのような接続詞をここに置いたのか？それは、前の１７－１８節を受けて話をしているからです。１７－１８節でパウロが言いたかったことは、私たちは罪から解放されて義の奴隷となったということです。そのことを受けてこれが理由だと言いたいのです。それが理由だから、今、私はあなたに新しい歩みを命じると、そのことをパウロはこの１９節で言わんとしているのです。「罪から解放されて義の奴隷となった」、これが理由であなたは新しい歩みを始めて行くことができると言います。ですから、パウロは逆に、新しく生まれ変わっていなければ、罪の奴隷のままなら、この新しい生き方は不可能だと言います。だから、パウロが与えるこの奨励は不可能なのです。パウロが言っていることは、あなたは救われているから、この命令をあなたは実践することができるということです。これは救われている人たちへのメッセージ、しかも、救われている人には実現可能なメッセージなのです。

２．ひとりの主人に仕えるのだから　　１９ｂ節

すでに、私たちが学んで来たことです。けれども、思い出してください。パウロは奴隷という比喩、例えを使いました。奴隷はひとりの主人にだけ仕えました。二人の主人に仕えることなどできませんでした。ですから、「私はイエスさまを信じたいけれど、これまでの生き方も継続して行なって行きたい。どうだろう？半分イエスさまを信じて、あとの半分はこれまでの生活をするというのは？」、残念ながら、それは聖書の教える救いではありません。罪に仕えるか義に仕えるのか、そのどちらかだと言うのです。サタンに仕えるのか神に仕えるのか、二人の主人に仕えることはできないのです。救われた人たちはみな神に仕える者です。神の奴隷として生まれ変わりました。「あなたはひとりの主人に仕える者です。あなたはそれゆえに、新しい歩みを為して行くことができる」と言うのです。そのことをパウロは、二つの生き方を比較することによって教えようとしています。

（１）かつて＝救われる前

１９節に**「以前は」**と**「今は」**と記されていることにお気づきになると思います。「かつて」と「今」です。これは明らかにパウロが救われる前の私と救われてからの私を比較をしていることを、私たちはここに見ることができます。かつての私、救われる前の私たちはどのように生きていたのでしょう？**「自分の手足を汚れと不法の奴隷としてささげて、不法に進みました」**とパウロはこのように記しています。思い出してください。皆さん、実はあなたはこのように生きていたのです。**「自分の手足を汚れと不法の奴隷としてささげた」**と。**「手足を…奴隷としてささげた」**ということは、すでには見て来ました。この**「ささげて」**という動詞ですが、かつての生き方**「奴隷としてささげて」**、そして、今の生き方**「義の奴隷としてささげて」**、どちらも同じ時制を使っているのです。パウロはかつての生き方に関して**「奴隷としてささげて」**と、そのような生き方をしていたという事実を述べたのです。かつてのあなたは、生まれながらに自分のすべ

てを奴隷としてささげていた、そのような生き方をしていた、それが事実だと言うのです。
　では、何にささげていたのでしょう？パウロは**「汚れと不法に…ささげていた」**と言いました。この二つはどちらも罪を指していてよく似た意味ですが、パウロは敢えて、この二つの意味を区別しています。
「汚れ」＝このことばはパウロ書簡において通例「性的な罪」に言及しています。例えば、ローマ人への手紙１：２４**「それゆえ、神は、彼らをその心の欲望のままに汚れに引き渡され、そのために彼らは、互いにそのからだをはずかしめるようになりました。」**とあり、この**「汚れ」**とは**「そのために彼らは、互いにそのからだをはずかしめるようになりました。」**、つまり、性的な罪のことです。ガラテヤ５：１９**「肉の行ないは明白であって、次のようなものです。不品行、汚れ、好色、」**、エペソ４：１９**「道徳的に無感覚となった彼らは、好色に身をゆだねて、あらゆる不潔な行ないをむさぼるようになっています。」**、同じように、**「汚れ」**が肉体的な性的な罪であることをみことばは教えています。
「不法」＝これは一般的な罪深い行為を意味しています。そこにはいろいろな罪が含まれます。パウロは１９節では「救われる前のあなたは汚れと不法の奴隷として自らをささげていた」と記していますが、ローマ書1章では、それをもう少し細かく、その生き方の詳細を表わしているように見えます。**「汚れ」**が２４節にありました。性的に汚れた生き方をしていたと。そして、不法にささげて生きていた、様々な罪を犯していたと言います。そのことは１：２９－３１にパウロがこのように記しています。**「彼らは、あらゆる不義と悪とむさぼりと悪意とに満ちた者、ねたみと殺意と争いと欺きと悪だくみとでいっぱいになった者、陰口を言う者、:30 そしる者、神を憎む者、人を人と思わぬ者、高ぶる者、大言壮語する者、悪事をたくらむ者、親に逆らう者、:31 わきまえのない者、約束を破る者、情け知らずの者、慈愛のない者です。」**、まさに、自分のすべてを不法にささげていた人がどのように生きているのかが明らかです。パウロはかつてのあなたはそうだったと言うのです。あなたはこのような罪の中を歩んでいたと言うのです。ですから、これを見た時に、私たちはここに自分の姿を見ませんか？自分の汚れを見ませんか？だれかほかの人のことを話しているのではなくて、これは私たちのことです。まさにパウロが教えたように、かつての私たちはこのように私たちのすべてを**「汚れと不法の奴隷として」**自らをささげていたのです。その上で、パウロは面白いことを言います。
　１９節に戻って、**「以前は自分の手足を汚れと不法の奴隷としてささげて、不法に進みましたが、」**と、**「不法に進んだ」**、この**「進んだ」**ということばは「不法の中へ、不法の方に、不法に向かって」と訳すことができます。つまり、あなたはこれまでこのよう自らを不法にささげて生きて来たが、その結果どうなったか？「あなたは益々不法に染まる者となった」と言っているのです。思い出してください、罪に対して、初め非常な罪悪感を持ちます。ところが、その罪を重ねて行くうちにその罪悪感は段々薄くなって行きます。そして、いつの間にかその罪から離れることができなくなってしまいます。罪のうちを歩み始めると、私たちはその罪に捕わられて行くのです。どんどん悪い方向へと進んで行きます。パウロが言いたいことは、このような罪の生き方をしている人は、益々良くなって行くのではない、神に喜ばれる者になるのではない、その逆に、益々神の前に罪を重ねる者となって行く、それが実はあなただったということです。私たちもその通りでした。年数とともに段々神の前に罪を積み重ねて来たのです、罪は少なくなるどころか増して行きました。なぜなら、私たちは神に対して心を頑なにして、神の救いを受け入れようとしなかったからです。
（２）今＝救われた後
　１９節の後半に**「今は、」**とあります。救われた後のあなたは**「その手足を義の奴隷としてささげて、聖潔に進みなさい。」**と言われています。先ほどもこの**「ささげて」**ということばの時制は、救われる前も救われた後も同じ時制を使っていると言いました。かつてはこのような生き方をしていたという事実を述べました。同じ時制ですが、ここでは「命令」です。なぜ、命令形を使ったのかと言うと、パウロはここで読者ひとり一人の意志に働きかけるからです。ですから、パウロは「今あなたは救われた。ゆえに、救われたあなたはその手足を義の奴隷としてささげるように、その選択をするように、その決心をするように」とあなたの意志に働きかけているのです。義に対して自分のすべてをささげるのです。つまり、あなたは神の前に正しいこと、義なることを継続して行きなさい、実践して行きなさいと言っているのです。パウロはＩテサロニケ４：７でこのように言っています。**「神が私たちを召されたのは、汚れを行なわせるためではなく、聖潔を得させるためです。」**、パウロはここで救われた目的はあなたが聖くなることだと言っています。神はあなたを聖くするために救ってくれたと、そのように言っています。罪から救われただけでない、神はあなたを日々聖め続けて行ってくれるのです。そして、そのように神の前に聖く歩んで行く生き方をして**「今は、その手足を義の奴隷としてささげて、聖潔に進みなさい。」**と言います。先の**「不法に進みましたが、」**と同じ書き方をしています。パウロは同じことを言っているのです。**「聖潔に進みなさい。」**とは「聖潔の中へ、聖潔の方へ、聖潔に向かって」と言います。
　説明を加えなければいけないのはこの**「聖潔」**ということばです。これの名詞を訳すと「聖化」となり

ます。そのことばがここで使われているのです。「聖化」ということばの意味は、神の目的のために特別に取って置かれるということです。たくさんある中で、神はある者をご自分の目的のために特別に選び分けておられる、それがこの「聖潔、聖化」ということばの意味です。つまり、イエス・キリストを信じているクリスチャンであるあなたは、この世界の中から神が特別に選んだのです。神があなたを特別にご自身の目的のために用いるためにです。家の中にもあります。特別なお客さんが来られた時に出す大切な器、それは日常使うものとは違うのです。それがここで使われていることば「聖潔」の意味です。

ですから、パウロが言っていることは、もし、あなたがそのように神の前に正しく歩んで行くなら、あなたは益々聖さにおいて変えられて行くということです。また、別の言い方をするなら、神の前に正しく歩み続けることによって、あなたは益々神にとって役に立つ者、神の尊い働きに用いられる者となって行くということです。そのように変えられて行くことを「聖化」と呼び、そのことばをここでパウロは使うのです。

かつての私たちは罪の中を歩み罪を愛して生きていました。その結果、罪人として益々神の前に大きな罪を犯す者になって行き、益々汚れて行きました。ところが、救われた私たちは神の前に正しく歩んで行くことによって、益々主に似た者へ、聖い者へ、神にとって役に立つも者へと変えられて行くと言うのです。全く違う生き方です。救われていない人と救われた人はこのように違うのです。そのことをパウロは言うのです。ウィリアム・バークレーはこのことばに関してこのように説明します。「ここで使われている聖潔というギリシャ語は「ハギアスモス」ということばを使います。このように最後が「アスモス」で終わるギリシャ語の名詞は、すべて、完成された状態ではなく過程を表わす。聖化とは完成された状態ではない。それは聖潔への道である。」と。その通りです。神の働きは終わっていません。神はあなたを益々聖い者へ、主に似た者へ変えようと働き続けておられるのです。でも、そのためにはあなた自身が神の前に、贖われた者として救われた者として生まれ変わった者として正しく歩み続けて行くことが必要なのです。それによって、神はあなたを益々ご自分にとって役に立つ者へと変えて行ってくださるのです。すごいことだと思いませんか？こんなにすばらしいことを神は私たちのためにしてくれたのです。これが「救い」だと言います。これがすばらしい真理だと。このことをしっかりと分かっていなければいけないと言うのです。

最初に話したように、パウロは確かに、ローマにいる人たちにこのメッセージを送りました。でも、パウロはこのメッセージをローマの人々だけでなくて、ありとあらゆる人たちに送っているのです。なぜなら、実は、これこそ私たちキリストによって救われた者たちが覚えなくてはいけないことだからです。あなたにとって大切なのです。新しくされた者としてそれに相応しく生きるということが…。そこで、同じことを教えている個所を今からいっしょに見ます。エペソ人への手紙５：８－１４です。８節は今私たちが学んでいるローマ６：１９と非常によく似ています。**「あなたがたは、以前は暗やみでしたが、今は、主にあって、光となりました。」**、以前のことと今のことです。かつては暗やみだったが今は光となったと。この８節でパウロは非常に大切なことを言っています。「あなたはかつては暗やみだった。」と、暗やみの中に生きていたとは言っていません。あなた自身が暗やみだったと言うのです。なぜなら、救われる前のあなたの生き方の特徴は「暗やみ」だからです。罪だということです。ところが、生まれ変わったあなたの特徴は「光」だと言います。ですから、キリストによって救われた者たちは、その神のすばらしさを周りに証する者として生まれ変わり、そのように生きて行くのです。

パウロがこのローマ書で教えているように、エペソ書でも同じことを言います。生まれ変わった者たちは、だれが主人であるのかということをその生き方によって明らかにして行くのです。ですから、どれ程救われたと言っていても、その人の生き方、その人の人生の特徴が罪であるなら、その人は罪に仕える者です。救われていないのです。救われている者たちは、完全ではないにしても、神のすばらしさを証する者です。キリストのすばらしさを証する者です。それがその人たちの特徴です。なぜなら、その人たちは新しい主人に仕える者に生まれ変わったからです。パウロは同じことを言っているのです。そのように８節で言った後、９節を見ると、このようなことばがご挿入されています。**「――光の結ぶ実は、あらゆる善意と正義と真実なのです。――」**、パウロは８節で**「光の子どもらしく歩みなさい。」**と言いました。**「光の子ども」**とはどのような人たちでしょう？その人たちの特徴をここでは三つ挙げています。それは「善意と正義と真実」とあります。

◎<u>エペソ５：９－１４から</u>

１．クリスチャンの特徴　　９節

（１）**善意**＝道徳的に正しい生き方をすることです。ですから、生まれ変わった人たちは神の前に道徳的に正しいことを行ない続けて行こうとする人です。

（２）**正義**＝神の前に正しいことを行ない続けて行くことです。仕える神が義なる神だから、その方に倣って正しいことを行なって行こうとします。Ｉヨハネ２：２９に**「もしあなたがたが、神は正しい方であ**

ると知っているなら、義を行なう者がみな神から生まれたこともわかるはずです。」とある通りです。
（３）真実＝これは、真実であるみことばに従い続けて行く人たちのことです。
　これが救われた者たちの特徴なのです。光の子どもの特徴なのです。道徳的に正しく、神の前に正しいことを行ない、みことばに従って歩む者たちだと言います。
２．クリスチャンの生き方　　１０－１４節
　この三つの特徴を述べた後、今度は１０節から１４節に、パウロは、その「光の子ども」の具体的な生き方を三つ挙げるのです。光の子どもたちの具体的な生き方です。
（１）神の前に喜ばれることを行なう　　１０節
　１０節**「そのためには、主に喜ばれることが何であるかを見分けなさい。」**、これが光の子どもが実際に生きて行くその生き方の特徴です。神に喜ばれることがいったい何であるかを見分けると。コロサイ１：１０で、パウロは自分の信仰者としての歩みに関してこのようなことを目標にしていると言っています。**「また、主にかなった歩みをして、あらゆる点で主に喜ばれ、あらゆる善行のうちに実を結び、神を知る知識を増し加えられますように。」**、彼はあらゆる点で主に喜ばれることを求めたのです。**「あらゆる点で主に喜ばれる」**というこの**「喜ばれる」**ということばは、神に受け入れられるとか、神を満足させるという意味を持ったことばを使っています。だから、パウロが望んだことは、自分が考えること、自分が口にすること、自分が為すすべてのことが、神を満足させ神に受け入れていただけることです。すごいと思いませんか？私たちとはかなり基準が違うと思いませんか？私たちはハードルをかなり低くして「まぁ、私たちは罪人なのだからこの位にしておこう…」となっています。パウロは自分のすることすべてが神に喜ばれ、神を満足させるものでありたいと願ったのです。エペソ５：１０の**「…を見分けなさい」**ということばは、検査や試験をした後で認めるということです。ですから、全部検査をするのです。そして、その上で、その試験、検査にパスしたら認めるのです。パウロがここで言っていることは、ただ自分の頭で考えるだけではなく、あるものをもって何が神の前に喜ばれるのかを判断するということです。
　その判断の基準になるのが神のおことばです。みことばによって、見分ける、検査するというのです。私たち信仰者はどうするのでしょう？私たちの選択も私たちの行動も、神のみことばに照らし合わせて間違っていないかどうかを吟味するのです。「そんなことをするなら人生は堅苦しくなって、自由がなくなってしまう….」、とんでもないことです。そのようにしないから、自由があるように思っても実は自由がないのです。神が私たちに教えていることは、私たちに必要なことは、私たちが正しく自分を知ることです。私たちは結構罪を許しています。なお言うなら、罪を罪と認めていないことを私たちはたくさんしています。すぐに激怒すること、怒ることなど、性格と片づけてしまっている人がいますが、気をつけなければ、そこには罪があります。もちろん、正しい怒りもあります。けれども、自分の思い通りに物事が進まないから怒る、これは罪です。そのような人は人に対して怒るだけでなく、神に対しても怒っている場合があります。思い通りに事が進まないからと…、罪です。でも、私たちは「「仕方ない、これ位のことは皆しているよ、皆弱いのだから…」と言います。人に対して嫉むことはどうですか？人の悪口を言うことはどうですか？人を赦さないことはどうですか？私たちは言います「皆、弱いから。」と。ローマ６章でパウロが教えたことを思い出してください。ある人たちは「私たちは律法の下にはなく恵みの下にあるのだから罪を犯そう、私たちは赦されているのだからいいではないか、罪を犯しても…」と言いました。その生き方に対してパウロは「絶対にそんなことはありません。」と言いました。
　皆さん、私たちは自分の生き方に関して、厳しくそれを吟味することが必要なのです。私がこのように物事を考えるのは、私がこの人に対してこのような思いを抱くのは、私がこのような行ないをするのは、私がこれまでと同じようにこの状況でこのように対応するのはと、いろいろなことを調べて、それが本当に聖書が良しとしていることなのかどうかを判断しなさいと言うのです。なぜ、そのことが大切なのでしょう？それによってあなたは本当の自分に気付いて行くからです。自分を正しく見つけること、見出すことによってあなたはこのようになって行きます。それは「神さま、どうしてこのような私をこれ程まで愛してくれるのですか？神さま、どうしてこんなに罪深い私を救ってくださったのですか？」と言うのです。確かに、私たちも言います。「神さま、救ってくださってありがとう」と、でも、どれだけの人が「神さま、私は間違いなく罪人のかしらです」と、心から告白しているでしょうか？口ではそう言っているかもしれませんが、本当に心から「私のような罪人は地獄に行きべきだ」と、心から信じ込んでいる人はどれだけいるでしょう？あの人よりもこの人よりもましだと思っていませんか？私たちに必要なことは私たちを正しく見ることです。神がご覧になっているように自分を見つめることです。
　では、どうすればそれができるのでしょう？私たちのしていることをすべてみことばに照らし合わせて見るのです。そして、私たちのやってきたことがどれ程良いと思っても、それは神の基準から外れていることに気がつきます。悲しいことに。それが私たちなのです。でも、感謝なことに、そのようなことを知った上で、神は私たちを救い出してくださったのです。神の大切な働きにこんな罪深い者を用い

るという、そのような計画をもって…。皆さん、そのことを私たちはしっかり覚えておかなければいけないのです。救われる価値のある人はどこにもいません。滅びる価値のある人は溢れています。私たちみな、すべての人です。でも、私たちが本当に正しく神に感謝をささげるためには、私たちは自分を正しく知ることが必要なのです。パウロがなぜ「私のすべてをもって神を満足させたい。受け入れてもらいたい。」と言ったのでしょう？彼自身、自分が完全でないことを知っているからです。でも、彼は自分に対して妥協しなかった。「神さま、私はあなたによって救われた者だから、あなたに喜ばれる生き方をして行きたい。かなりの助けが必要ですが、でも、そのように生きて行きたい。そして、私は自分のしていることをしっかりと吟味して、それが本当に主に喜ばれるかどうか、みことばによって見分けて行きます。そして、私は間違っていることから離れて正しく歩んで行きたい。」と、その決心をして生きていたのです。

皆さんはそのように決心をしておられますか？そんな強い思いをもって信仰生活を真剣に生きていますか？パウロが私たちに教えてくれるのは、彼はそのようにして生きていたことです。彼は神に喜ばれることを行ないたいと言いました。真剣だったのです。

（２）神が嫌われることから離れる　　１１ａ節

１１節**「実を結ばない暗やみのわざに仲間入りしないで、むしろ、それを明るみに出しなさい。」**、つまり、パウロは神の栄光を現わさないで汚している人たちから離れたいと言うのです。私は罪を犯している人たちの仲間になりたくないと言っているのです。「仲間になる」ということばは「いっしょに分け前にあずかる、ともに参加する、関与する、行動をともにする」という意味です。だからパウロは、神の栄光に無関心な人、神の栄光を現わしたくないと思っている人、そのような人たちから私は距離をおく、彼らとはいっしょに行動しないと言っているのです。私たちはそのようなことをしているでしょうか？「みな罪人なのだからいいではないか」と妥協していませんか？パウロは徹底して神が嫌われることから離れたいと思っています。このエペソ人への手紙４－５章には、救われる前の人の姿が書かれています。４：２２**「その教えとは、あなたがたの以前の生活について言うならば、人を欺く情欲によって滅びて行く古い人を脱ぎ捨てるべきこと、」**と、かつての救われる前の姿は欲望のままに生きていた、そのような人だった、そういう人から私は離れると言うのです。２５節**「ですから、あなたがたは偽りを捨て、おのおの隣人に対して真実を語りなさい。私たちはからだの一部分として互いにそれぞれのものだからです。」**、真実ではない人たち、嘘や偽りに関して問題を感じていないような人、救われる前は「嘘も方便」、当然でした。でも、救われた私は嘘から離れ、嘘に対して問題を感じない人からも離れると言います。２６節では**「怒っても、罪を犯してはなりません。日が暮れるまで憤ったままでいてはいけません。」**、怒りやすい人です。救われる前はすぐに感情的になっていたが、救われた私は間違った怒りからも離れる、同時に、感情的になってすぐに怒る人からも距離をおきたいと。２８節**「盗みをしている者は、もう盗んではいけません。かえって、困っている人に施しをするため、自分の手をもって正しい仕事をし、ほねおって働きなさい。」**、盗むことに問題を感じない人、そのような人からも離れていたい。２９節、悪いことばを口にする人からも距離を置きたいと言います。**「悪いことばを、いっさい口から出してはいけません。ただ、必要なとき、人の徳を養うのに役立つことばを話し、聞く人に恵みを与えなさい。」**、３１節**「無慈悲、憤り、怒り、叫び、そしりなどを、いっさいの悪意とともに、みな捨て去りなさい。」**、**「無慈悲」**、人々に反感や恨みをもっている人です。**「憤り」**、気をつけて、だれかに対して復讐をしたいという怒りを思いをもっている人から私は離れておきたい。「**そしり**」、人を中傷したり悪口を言ったり誹謗したりする人、私は確かにそのような人物だったが、救われた者としてそのようなところから離れたいし、そのような人からも距離をおきたいと。５：４では不道徳なこと、**「また、みだらなことや、愚かな話や、下品な冗談を避けなさい。そのようなことは良くないことです。むしろ、感謝しなさい。」**、このようなことは言いたくないし、そのように言っている人と行動をともにしたくない。５：５には不品行とあります。**「あなたがたがよく見て知っているとおり、不品行な者や、汚れた者や、むさぼる者――これが偶像礼拝者です。――こういう人はだれも、キリストと神との御国を相続することができません。」**。パウロはこのような人たちから離れるように、距離を置くようにと教えています。

Ｉコリント５：９－１３**「私は前にあなたがたに送った手紙で、不品行な者たちと交際しないようにと書きました。:10 それは、世の中の不品行な者、貪欲な者、略奪する者、偶像を礼拝する者と全然交際しないようにという意味ではありません。もしそうだとしたら、この世界から出て行かなければならないでしょう。:11 私が書いたことのほんとうの意味は、もし、兄弟と呼ばれる者で、しかも不品行な者、貪欲な者、偶像を礼拝する者、人をそしる者、酒に酔う者、略奪する者がいたなら、そのような者とはつきあってはいけない、いっしょに食事をしてもいけない、ということです。12 外部の人たちをさばくことは、私のすべきことでしょうか。あなたがたがさばくべき者は、内部の人たちではありませんか。:13 外部の人たちは、神がおさばきになります。その悪い人をあなたがたの中から除きなさい。」**、１１節に**「そのような者とはつきあってはいけない、いっしょに食事をしてもい**

けない、」とあります。大変なことです。彼らと交際してはいけないと言うのです。でも、パウロはここでこのような注釈を付けています。イエスを信じていない人のことを今言っているなら、私たちはこの世から出て行かなければいけません。この世の中はその人たちで溢れているからです。パウロが言っている交わりを持ってはいけない人、その対象はイエス・キリストを信じていない人ではなくて、信じていると言っている人たちのことです。自称クリスチャンたちです。クリスチャンであると言いながら、このような生活を今もなおしている人たちから距離をおきなさい、離れなさいと言っているのです。
Ⅱテサロニケ３：１４にはこのように記されています。**「もし、この手紙に書いた私たちの指示に従わない者があれば、そのような人には、特に注意を払い、交際しないようにしなさい。彼が恥じ入るようになるためです。」**と、クリスチャンだと言っていながら、このような罪の中を生きている人々と距離をおきなさいと、パウロはそのように命じて、そのように生きたのです。何のためにでしょう？願わくは、そのことによって彼らが神のもとに立ち返って行きたいという思いを抱くためです。罪を犯している人々に対して私たちは「構わない、みんな罪人なのだから…」というような態度をもって接してはならないのです。もし、そうなら私たちは「教会戒規」などは出来ません。罪は罪なのです。罪は罪として正しく扱わなければいけません。もし、キリストを信じていると言っている人がそのような生き方をしているなら、主人は神かサタンのどちらかです、未信者と変わらない生き方をしている彼らは救われていないか、救われていて罪を犯しているかのどちらかです。私たちがそのような人に対して言えることは、「罪を悔い改めなさい」ということです。そして、必要なら、彼らとの交わりを断たなければいけません。それによって彼らが神のもとに立ち返って行くためです。パウロ自身が言ったことは「私は神が嫌われることから離れます」です。

（３）みことばに従い続ける　　１１ｂ－１４節

１１ｂ－１４節**「むしろ、それを明るみに出しなさい。:12 なぜなら、彼らがひそかに行なっていることは、口にするのも恥ずかしいことだからです。:13 けれども、明るみに引き出されるものは、みな、光によって明らかにされます。:14 明らかにされたものはみな、光だからです。それで、こう言われています。「眠っている人よ。目をさませ。死者の中から起き上がれ。そうすれば、キリストが、あなたを照らされる。」**

１１節の終わりに**「それを明るみに出しなさい。」**と言っています。何のことでしょう？私たちがいつも直面する物事に対して、それをみことばに照らし合わせて判断をしなさいということです。みことばが私たちに光を与え真理を教えてくれるのです。私たちには分からないことがたくさんありますが、聖書に戻って、みことばに照らし合わせて、その中でみことばが教えることを選択するのです。この状況にあってどのような選択をすることが神の前に喜ばれることかを考えて、私たちは選択することができます。みことばにしっかりと立ってそのみことばに従って行くようにと言うのです。詩篇１１９：１３０には**「みことばの戸が開くと、光が差し込み、わきまえのない者に悟りを与えます。」**とあります。

１４節の最後に、パウロはイザヤ書６０：１を引用しています。**「眠っている人よ。目をさませ。死者の中から起き上がれ。そうすれば、キリストが、あなたを照らされる。」**、二つのことをここで語っています。一つは、未信者に対するメッセージです。**「眠っている人よ。目をさませ。」**と、つまり、あなたの罪から離れなさい、罪を悔い改めて救いを得なさいということです。もう一つはクリスチャンに対するメッセージです。暗やみの中にいる人々に対してキリストこそが光であることを明らかにしなさいと言います。

今、簡単に見て来ました。パウロは光の子どもとされた人、救われた人はどのように生きて行くのかを教えました。神に喜ばれることを選択し、神の嫌われることから離れ、そして、どんな時にもみことばに立って生きて行くと。みことばによって私たちが何を選択するのかを考える、そして、みことばを宣べ伝えて行く、そのように歩みなさいと言うのです、それが光の子なのです。暗やみの罪の中にいる人たちに、このキリストにこそ救いがあることを明らかにし続けて行くのです。光の子だからです。このエペソ人への手紙を見ても教えられることは、救われた私たちは救われた者に相応しい生き方をしなさいということです。パウロは全く新しいことを話しているのではありません。救われた者はそのように生きなさいと教え続けています。

もう一度、ローマ書に戻って、最後に、１９節に**「以前は自分の手足を汚れと不法の奴隷としてささげて、不法に進みましたが、今は、その手足を義の奴隷としてささげて、聖潔に進みなさい。」**とある、この**「ささげて」**という動詞について何回か話しました。ジョン・マレーという神学者は「この動詞の時制は、これが心からの誓約であったことを表わす」と言っています。私たちが奴隷について学んだことを思い出してください。奴隷はただひとりの主人に仕えるのです。ですから、罪の奴隷であったときには罪という主人に一生懸命心から仕えていたのです。その主人を喜ばせるために。それでは、生まれ変わったあなたは今度は義の奴隷として神の奴隷として、その方を一心に喜ばせるために心から従いなさいと言うのです。ですから、この１９節の第２文節、**「あなたがたは、以前は…」**に「同様に」という意味をもった接続詞をパウロはわざと付けたのです。つまり、これまであなたが心から熱心に歩んで来た、それと同じよ

うに、新しい主人に対しても生きて行くようにと言っているのです。罪という主人に心から服従して来たように、今度は、新しい主人である義に同様に従って行きなさいと。これがメッセージなのです。これがパウロが勧めたことです。

最初に話したように、この奨励というのは、私たちイエス・キリストを信じる者にとって不可能なことではなくて、可能なことなのです。だから、この命令が与えられているのです。神はあなたの内に働きを始められました。あなたを変えて行こうとされています。そして、パウロはこのように生きて行きなさいと言います。あなたが本当に変わって行くために必要なことは何か、もうお分かりでしょう。神がこのように生きなさいと言われました。そのようにあなた自身が決心することです。あなたがこの命令に対して「分かりました神さま、私はそのようにあなたが私を生まれ変わらせてくださったから、生まれ変わった者として生きて行きたい。どうぞ、私を助けてください。」と、このように決心しないことには、このわざはあなたの内に始まって来ないのです。大切なことは「あなたの選択」なのです。パウロは確かにこの奨励を与えました。それが出来るからです。しかし同時に、あなたの責任も彼は問うています。このように生きなさいと言った彼は、当然、あなたがその選択をすることを期待しています。問題は、あなたはその期待通りに選択をするかどうかです。それがなければ神は働いて来ないし、変わって来ないのです。私たちがこの神の約束を信じて正しく歩んで行くときに、私たちは光の子としてこの世にあって、キリストのすばらしさを証します。神が私たちを特別に選んでくださった、特別な器として選んでくださった、そして、その神にとって役に立つ者として生きて行くことが出来るのです。でも、そのためにはあなたが決心しなければいけません。「主よ､使ってください！」と。しかし、この決心は難しいのです。

私たちが支援するフィリピンのエドワード・イシドロ先生がこのようなことを言いました。かつて、スラムに連れて行かれましたが、そこはごみ溜めの中で自然発火した所から煙が立ち昇っています。悪臭が立ちこめて、思わず鼻と口を覆いたくなるようなそのような場所に連れて行かれた時です。「実は、私もこのようなスラムに生まれ育った」と。私はこのようなスラムの子どもや人々を助け出すには多額の援助が必要ではないかと思いましたが、彼は言いました、「どんなにお金を与えてもこのスラムから彼らは出ることは出来ない。」と。「では、どうすればそこから出ることが出来るのか？あなたと同じように。」彼はこう言いました。「ここから出ようと決心することだ。」と。スラムの人たち自身が「私はここから出たい」と決心する、その時にそれが可能になると言うのです。私たちが自ら変わることを決心しなければ、変わりたいと決心しなければ変わって来ないのです。そして、そのことを神は望んでおられます。

どうされますか？今のまま歩み続けて行きますか？それとも主の約束に従って｢主よ。どうぞ私を変えてください。私はあなたの教えてくださったみことばに従って行きます。｣と、その決心をして出て来るのでしょうか？どうぞ、正しい選択をしてください、兄弟姉妹の皆さん。正しい選択こそがあなたを変える秘訣です。あなたが正しい歩みを為して行く最も大切なカギです。